AFTER THE CRACK



第二部

敷居 5

亀裂のあとで

私たちが軽々しく使う表現がある。

「生まれ変わった気分だ」

「一からやり直した」

「新しい人生だった」

ふつう、それらは比喩だ。

言葉のあや。

変化を語るための洒落た言い回し。

だが、その言葉が象徴であることをやめる瞬間が存在する。

そして文字どおりのものになる。

長いあいだ、人生を一本の連続した線として思い描いていた。

浮き沈みはある。

加速も減速もある。

成功も問題もある。

だが、いつも同じ線。

いつも同じ旅。

やがて、体が死ななくても人生は断ち切られ得ると分かる日が来た。

世界の見方が断ち切られることがある。

自己が。

確かさが。

計画が。

自己像が。

そして、それが起こるとき、向こう側から現れる人間は、入っていったときの人間と決して同じではない。

はじめは抗おうとする。

救えるものを救おうとする。

修復しようと。

再建しようと。

日常に戻ろうと。

自然な反応だ。

私も同じことをした。

連続性を取り戻したかった。

断ち切れたものを結び直したかった。

以前へ戻りたかった。

やがて、受け入れがたいことを理解した。

「以前」は、もう存在しなかった。

追いかけても無駄だった。

これは人生で最も高くつく教訓のひとつだ。

小さな喪の作業を求めるからだ。

かつての私たちへの喪を。

私たちは失う人々についてはよく語る。

失う自己について語ることは、はるかに少ない。

それでも、それらもまた葬儀に値する。

かつての息子であることをやめる瞬間が存在する。

かつての職業人であることを。

かつての男であることを。

かつての女であることを。

私たちのひとつの姿が、その務めを終える瞬間が存在する。

そして別の何かに席を譲る。

あの季節を通り抜けていたとき、すぐには気づかなかった。

危機だと思っていた。

幕間だと。

事故だと。

後になってようやく、自分が変容を通り抜けているのだと分かった。

その違いは途方もなく大きい。

危機とは、終わってほしいと願うものだ。

変容とは、あなたを永遠に変えてしまうものだ。

あらゆる確かさが宙づりに見えた時期を覚えている。

古い答えはもう機能しなかった。

古い道具では足りないように思えた。

いくつかの目標さえ意味を失った。

不安をかき立てる感覚だった。

見慣れた風景を歩いていて、すべての道が向きを変えてしまったと気づくような。

しばらくは古い地図で方角をつかもうとした。

役に立たなかった。

変わったのは私だったからだ。

地図が間違っていたのではない。

時代遅れになっていたのだ。

大きな移行期に起こるのはこういうことだ。

問題は、変わりゆく世界からだけ生じるのではない。

過去に属する目で世界を読み続けることから生じるのだ。

やがて、ゆっくりと、何かが整い直す。

一日では起こらない。

一週間でも起こらない。

何百もの小さな調整を通じて起こる。

新しい自覚を通じて。

新しい優先順位を。

新しい問いを。

ある朝目覚めると、現実を違うふうに眺めている自分に気づく。

同じものを。

違う目で。

そのとき、再生の本当の意味を理解し始めた。

若返ることではない。

痛みを消すことではない。

過ちを帳消しにすることではない。

起こったすべてと新しい関係を結ぶことなのだ。

傷と。

恐れと。

喪失と。

機会と。

時間そのものと。

第二の人生は、第一の人生の否定からは生まれない。

その統合から生まれる。

かつてのあなたのすべては存在し続ける。

だが、もう現在を支配しない。

経験になる。

記憶になる。

建築の材料になる。

多くの人は、再生を華々しい出来事として思い描く。

私は違うかたちでそれを生きた。

ゆっくりとした再建として。

煉瓦をひとつずつ。

考えをひとつずつ。

決断をひとつずつ。

多くは沈黙のうちに。

多くは観客もなしに。

多くは、何が起きているのか誰にも気づかれないままに。

それでも、起きていた。

物事の深いところで。

時が経つにつれ、他の人々を違う目で見るようになった。

ほとんど誰もが、複数の人生を生きているのだと理解した。

必ずしも複数の生物学的な生ではない。

複数の内なる章。

複数の自己。

複数の変容。

私たちは顔を見て、連続性を思い描く。

だがその顔の裏には、同じ人間の五つ、十、二十の異なる姿が存在しているかもしれない。

どれも現実で。

どれも生き延びて。

どれも必要だった。

だからこそ、年齢とともに慈しみがいっそう重要になるのかもしれない。

他人の見えない戦いを尊ぶことを学ぶからだ。

誰も見かけどおりのものだけではないと理解する。

誰もが崩壊と再建の物語を内に抱えている。

喪失と再生の物語を。

象徴的な死と新たな出発の物語を。

振り返っても、あの時期を美化はしない。

もう一度生きたいとは思わない。

困難だった。

混乱していた。

ときに苦痛だった。

だが、その価値は認める。

あの変容から、それまで存在しなかった誰かが生まれたからだ。

より自覚のある誰かが。

より注意深い。

より人間的な。

おそらく、自信は減った。

だが、はるかに偽りがない。

そして大事なのはそこだ。

道の果てで、歩んできた道のりを眺めるとき、私に見えるのはひとつの人生ではない。

少なくとも二つ見える。

第一の人生は期待の上に築かれた。

第二の人生は理解の上に築かれた。

第一は「すること」を軸に。

第二は「在ること」に、より心を向けて。

第一は知っていると確信し。

第二は耳を傾ける用意がある。

だから、第二の人生と語ることに、いかなる誇張もない。

詩的な言い回しではない。

比喩ではない。

事実の確認だ。

単に方向を変えるのではない瞬間が存在するからだ。

生そのものを変えるのだ。

そして本当にそれが起こるとき、第二の人生は比喩ではない。

第一の人生が教え得るすべてを教え終えたあとに、残るものなのだ。